倉橋惣三への一つの接近（その一）

――「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性――

本田和子

明治四五年二月「心理研究」に、「一葉女史の小説に現れたる子供」という一文が掲載されている。倉橋惣三によって発表された数多い論稿の中で、極めて初期に属するものの一つであった。彼が全生涯にわたって活字化し世に贈った文章は、八二一を教えるとされるが、その中で、三八番目の発表順位を占めるのが、この「一葉研究」であった。

これは、倉橋の論文として初期に属するだけではなく、「一葉研究」としても極めて早い時期に公にされていて、しかも、優れたものの一つと評価されている。例えば、青木一男は、『たけくらべ』論を研究史的に通観した一文の中で、次のように述べている。「この論文は、心理学の立場から『たけくらべ』に登場する少年少女の心理分析をしたもので、鑑賞・批評の分野から見てもユニークな好論文と言えよう。」(*1)

樋口一葉によって『たけくらべ』が発表されたのは、周知のとおり、明治二八年一月～二九年一月にかけてのことであった。然し、後に彼女の代表作とみなされるこの小説に関しては、二九年発表直後に「めざまし草」(*2)が採り上げて論評し、とりわけ、幸田露伴が心理描写の巧みさを絶讃して以来、不思議なくらいの沈黙が続き、その後、十数年にわたって書評も研究も出現しないという状態であった。そのような状況下に、大方に顧みられなかったこの作品を倉橋があえて論考の対象に選んだという、この出来事は、彼と「一葉作品」との出会い、とりわけ「たけくらべ」とのそれがなみ〳〵ならぬものであったことを偲ばせる何よりの証ではないだろうか。

しかも、その女主人公「美登利」の名前を、彼は、教え子たちの同窓会名として選んでいる。すなわち、東京女高師に附設されていた幼稚園教諭の養成課程、当時は保育実習科と呼ばれた、の卒業生の団体を、「美登利會」と命名したのであった。「美登利」は、周知のように、吉原遊廓の近くに育つ遊女の卵である。姉は、全盛の花魁であり、彼女も、やがては姉と同じ道を歩むであろうことが暗示されている、そんな少女の名前が、何故、幼児保育者たちの団体名として選ばれねばならなかったのだろうか。看護婦たちの同窓会が「ナイチンゲール会」とか「聖テレジャ会」などと命名されるのとは、余りにもその位相を異にするこの選択にも、一入の興味を唆られざるを得ない。

倉橋にとって、「たけくらべ」とは、そして「美登利」とは、一体、何であったのだろうか。

◈　◈　◈

私は、ここで、倉橋と「たけくらべ」との関連を、次の三点から考察することを試みたい。すなわち、(1)「たけくらべ」という物語自体の性格的特色と倉橋にとっての意味、(2)女主人公「美登利」の女性像、(3)「たけくらべ」の舞台空間と倉橋の活躍した保育界という舞台空間の重畳性、の三点である。

わが国保育界のカリスマ的存在である倉橋に対しては、その保育界の指導者としての側面に焦点が当てられ、しば〳〵論考の対象とされてきた。そして、その基盤をなす「子ども観」が、信仰とも言えるほどの絶対的な信頼と帰依に支えられたものであり、その結果として無類の楽天的・浪漫的な発達観が導き出されて、彼の教育論の骨子とされた、という指摘が多くの人々によってなされている。

また、一方では、内村鑑三門下であった若き日の倉橋を俎上にのせて、そのキリスト者としてのありようにメスを加え、そこを起点として彼の保育論に批判的見解を加えようとする試みも見られる。

ところで、一生を通じて「子ども教」の信奉者であり、高らかに「子ども讃歌」を歌い続けた倉橋が、イエス・キリストに憧憬し、聖書の世界に詩的正義の源泉を見つゝ、同時に、「美登利」という遊女の卵に限りない愛惜の情を注ぎ、そしてこの早熟な小娘の中に「永遠のアニマ」を見ていたとするなら、倉橋という一人の人間の中で「子ども」とは、どのような広がりにおいて位置を占めていたのであろうか。イエスの愛し給うた幼な子を一方の極とし、遊里をめぐるこましゃくれた子ども群像をいま一つの極として、その二極間に多層的に遍在する様々な子どもたち。倉橋が、その一つ々々と関係を取り結んだとすれば、その子ども観・

人間観は、巷間に定説化されているほどに一枚岩的なものであり得たのか、否か。「たけくらべ論」を手がかりとして私が試みようとするのは、倉橋惣三のこの多次元性に対する搦手からの接近なのである。

(1)物語の特色と倉橋にとっての意味

倉橋は、「たけくらべ論」の附言として、文学的児童研究の必要性を次のように説いている。すなわち、「実験と分解を主とする研究と、観察と具象的描写とから得る知識とが相補うて、初めて実際に活きている児童を精確に理解することができる」[*3]のであり、しかも、「観る力、描く力」においては、芸術家に如くものは少ないのだ、と。さらに、わが国の場合、「児童観を詠唱説述したものは比較的多くあっても、純な児童の生活のありのままを主材として描写した文学はきわめて少ない」[*4]ゆえに、『たけくらべ』は、「古今の珍宝」として位置づけ得る、というのである。

この論稿が発表されたのは、先に触れたように、明治四五年、倉橋が三〇歳の時であった。然し、作品そのものとの出会いは、正確に跡づけようもないものの、それよりも可成り早い時期であろうと推定される。何故なら、彼自身が、先の附言の中で、「比較的古いこの作を用いたのは、最近の文壇に対する余の知識の乏しきによる」[*5]と断っているからである。この当時の倉橋の周囲には、新進の児童研究家として、また、「フレーベル会」の幹事、機関誌『婦人と子ども』の編集責任者として、漸く多忙な時間がめぐり始めていた。恐らくは、新刊の小説類に広く目を通すことなど、困難となりつゝあったのであろう。そのゆえに、「かつて」彼の心に鮮烈な映像をやきつけたであろうこの作品が、対象として選ばれたのであった。

周知のとおり、倉橋は、明治一五年の生まれである。従って、彼の少年期は、巖谷小波によって最初の少年文学と目される「こがね丸（明二四）」が発表され、続いて、博文館から「お伽文学」「少年文学」のシリーズが相次いで刊行されるという、わが国児童図書の草創期と軌を一にしている。それゆえに、彼も、時代の子として、それら少年文学のあれこれと出会いつゝ成長の歩みを歩んだであろうことは、想像に難くない。

明治期最高のベストセラーといわれる中村正直訳の『西国立志編』、あるいはジュール・ベルヌの科学小説などとも全く無縁であったと考えることは、むしろ不自然に過ぎよう。また、明治一一年生まれの寺田寅彦や、一九年生まれの谷崎潤一郎が、その少年時代の読書体験として、それぞれ『絵本西遊記』や『経国美

談』を挙げていることから見て、倉橋にも、ほぼ同様の読書歴を想定せざるを得ないかも知れない。

ところで、ヴェルヌの小説や『経国美談』は、そもそもが青少年文学とは言い得ず、小波らによって整えられた少年文学の系譜とは、自ずからその性格を異にしていた。にもかゝわらず、それらに一貫するある種の共通性、すなわち「男っぽさと行動の論理」とでも言うべき特質を、そこに認めざるを得ないのではないか。それらは、若者たちの視線を外に向かわせ、行動への意欲を唆す。作品世界の登場人物たちが、そのように行為し、それら前向きのモラルのにない手であったことは言うまでもない。こうして、当時の若者文学は、立志・勤勉・努力などの日常的な価値の体系と、通俗的なモラルに裏付けられた世界を読者の前に出現させ、その体制的な表側の論理に若者たちを巻きこむべく機能したのであった。事実、多くの若者たちが、これらの作品群との出会いを、自分たちの人生の行程にそのように位置づけて成長していった。

これらに比すとき、「たけくらべ」の描き出した少年少女群像は、根底から異質であった。若者たちに向けて、「少年よ、大志を抱け。青年よ、雄飛せよ」と煽り続けているこの時代に、それらとは全く無縁の世界が、「たけくらべ」の中には出現しているのである。僧籍を継ぐべく運命づけられ、そのためには学問の道を選ばざるを得ない信如を唯一人の例外として、他の登場人物たちは誰一人として学業などに精を出す者もない。大音寺前という矮小な生活圏内に自足して、子ども同士の縄張り争いに浮き身をやつし、束の間の子ども時代を余念もなく遊び呆けているのだ。

彼らの遊び空間、つまり「大音寺前」と呼ばれるこの裏ぶれた一廓は、吉原遊廓の門前町であった。従って、子どもたちの生活は、多かれ少なかれ、遊廓とのかゝわりにおいて営まれている。例えば、美登利の姉は全盛の花魁であって、彼女が子ども仲間の女王であり得るのも、その余徳で常に豊富な小使い銭の持ち主だからである。正太が家業として継ぐであろう金貸し業も、廓との関係が深かった。廓の繁栄のおこぼれで生計を営み、おはぐろどぶに映る不夜城の灯に憧れて成長する。日常的な庶民の良識が、恐らくは眉を顰めるであろうそんな環境の中で、子どもたちは、世間一般が与えるさげすみの「徴」に気付くよしもなく、たゞ瞬間々々を生きているのだった。

春を鬻ぐ女を「遊女」と呼び、その女を買う行為を「遊ぶ」と称し、それを行なう場所に「遊廓」という名を与える。日常生活の外に位置づく男女のことは、いつの頃からか「遊」の字が冠され、「遊び」の相においてとらえられるようになっていた。『たけ

くらべ』の子どもたちの遊び空間は、これら大人の「遊びの世界」と深く結びついていたのである。

遊廓が、囲われた特殊な空間として発達したのは、江戸幕府による体制的な住空間構造化の所産とされている。[*6] すなわち、士・農・工・商という身分制度の確立とその強化がはかられる過程で、そのいずれにも属さない人々は秩序の外に置かれ、通常の民とは異なる特別の「徴つき集団」を形成させられた。これらの人々の居住の場も、日常的な庶民の生活から隔離されて、特別の「徴つき」の場所が用意された。いわゆる賤民部落という被差別空間の発生である。そして、芝居小屋・寺院・売春窟なども、この特別な空間のそれぞれに位置づけられたのであった。

江戸の街はずれに位置する吉原遊廓は、その典型的な姿である。おはぐろどぶで囲われ、大門以外はすべて閉ざされて外界と遮断された特別の空間、日常生活の身分も価値観もその中では通用しない世界、日常的秩序とは別の秩序に支配され、昼は眠って夜に目覚めている逆様の生活、それが吉原遊廓だったのである。

ところで、これら大人の「遊びの場」は、閉鎖的な非日常的世界であり、日常的秩序の外に位置するという意味で、子どもの世界と同じ位相でとらえられる。子どもの世界とは、本来的に、特別の価値体系と秩序に支配される世界なのだ。例えば、学業成績が優秀であることにもまして虫捕りの名人が尊敬され、権官を父に持つこと以上に、手品の巧みな親の子が羨望される、というように……。日常的な大人の世界を「俗」と見るなら、子どもの世界は「聖」の徴の附さるべき世界であり、遊廓も同じ意味で「聖なる場所」であった。

とすれば、吉原という、日常的には「辺界の悪所」と蔑まれる場所の近くに位置して、それら遊里と非日常的聖性を極限まで共有しながら、己れらの子ども時代を開花させているのが、『たけくらべ』の少年少女たちである、と言えないだろうか。そして、倉橋が、こゝにこそ真の子どもの世界がある、と観じたのは、この反俗性のゆえとも見ることが出来よう。

前田愛は、この作品の中には、「子どもの時間が封じこめられている」[*7] と評している。確かに、それは「封じこめられて」いて、未来へ向かう直線的な時間の流れに合流しようとはしない。倉橋は、それを次のようなことばでとらえた。すなわち、「どこまでも児童の世界を世界としたこの作の、余韻をだに大人の世界へ引き延ばしてないところが嬉しい」[*8] と……。

青少年文学に象徴されるように、この時代は、若者たちを、未来へと直進する時間の奔流にのせ、誰よりも巧みに誰よりも早くそれを泳ぎ、勝利者となることを要請した。子ども時代とは、将

来の英雄に向かって志を立て、努力の第一歩を踏み出すべき出発地点に過ぎない。そこがスタートラインである限りは、ぐず〳〵と止まり続けることは許されないだろう。

然し、『たけくらべ』の子どもたちは、ものの見事に、自分たちの時間を手に入れていた。彼らは、己れらの空間を「大音寺前」という狭く囲われた地域に限定し、但し、そこを完全にみずからのものとして占有していたように、時間をもまた「いま」に止めて、心ゆくまでそこに滞在しようとしている。彼らは、まさしく、子ども時代を「原型として」生きているのだ。

私どもはこゝに、子ども時代の「無時間性」を見ることが出来る。すなわち、子どもという時をさながらに生きる彼らにとって、通俗的な意味での「時間」は、存在しないに等しいのだ。そして、倉橋の心をとらえたのも、このような「無時間的時間」の輝きだったのであろう。

ところで、他方で、倉橋は、作品中の子どもたち、とりわけ美登利に訪れる急激な変化に瞠目し、次のように述べる。「しかし、『たけくらべ』が与えてくれる描写の中で、最も貴重に、最も妙をきわめているのは、後半段における美登利が、我まま放題、負けじ気象を押し通して、人を人とも、事を事とも思わない無遠慮無頓着なお侠(きゃん)から、急にむすめに変わってゆく心理激変の描写である」(*9)と。子どもとは、決して永遠に子どもではあり得ず、成長という名の変化、当り前でしかも厳粛な事実を引き受けねばならない存在である。そして倉橋は、それを、誰にもまして率直に、かつ粛然と、肯定していたのであった。

彼にあって、子ども時代とは、「無時間」なるがゆえの「永遠性」と、成長という必然を負うものとしての「有限性」の、この両義性において現前するものであった。「子どもの聖性」に関しても、同様である。倉橋は、「児童中心主義者」と目され、それはしば〳〵、大正童心主義と同列に論じられてきた。然し、彼によって観じられた子どもの「聖性」とは、先にも触れたように、遊廓や賤民集団の顕現する「聖性」と等質であるような、そんな位相にあるように見える。「子どもは天使である」を讃美する一面的・憧憬的なそれらと、果して同列であり得るのか、否か。『たけくらべ』に対する倉橋の強い関心と執着は、これらに関して、私どもにつきつけられた一つの問いなのである。(つづく)

*1 青木一男「たけくらべ研究」教育出版センター
*2 「めさまし草」4(一九年四月号)の「三人冗話」という書評欄が「たけくらべ」を激賞している。
*3・4・5・8・9 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」倉橋惣三選集第四巻所収
*6 廣末保「辺界の悪所」平凡社選書
*7 前田愛「樋口一葉の世界」平凡社選書